発行月：2024 年 4 月
発　行：真宗大谷派　辻徳法寺

第 48 号

徳　　朋

人間が最後に学ぶべきこと

伊藤　元

いとう　はじめ
1935－現在
福岡県生まれ。真宗大谷派徳蓮寺前住職。

ヨーロッパの方で、「人間が最後に学ぶべきことがある」という言葉があります。これはキリスト教の精神ですが、キリスト教徒でなくてもそう言っているそうです。人間がいろんなことを学ぶことは大事です。しかし最期に学ばねばならないのは「穏やかになることを学ぶ」ことだそうです。偉くならなくてもいいというのです。

「穏やか」ということは、自分の身に起こってきたことと、自分の心が最終的に同調するということです。「私はなぜこんな目に遭うのか」という時は同調していないのです。思いもよらないことが起こったら、世の中が悪いとか、あの人が悪いとか、原因を他のせいにして認めようとしないのが私たちです。同調するということは、これを受け取っていこうということです。それが出来なかったら、きつくなるばかりで穏やかにはなれないのです。

この穏やかになるということは、やはり努力や心がけではできません。自分の思い込みや分別がどこかで破られないとだめなのです。宗教というのは人間の主観性を破らないような宗教は本物ではありません。自分が確かなものと思っていた、その主観が破られるかどうかなのです。

「本願を信受するは、前念命終なり」（愚禿鈔）という親鸞聖人のお言葉があります。本願

の教え（仏さまの教え）をいただくということは、それまでの自分の思い（前念）が死ぬということです。自分が今まで確かだと思っていた思い込み（前念）が壊されるということです。そこから歩みが始まると親鸞聖人は言われているのです。前念が命終しないような歩みをどこまで極めても仏道にはなりません。世間と仏道との断絶を超えさせるものが「前念命終」なのです。

日々の暮らしで穏やかになること、穏やかな心をもつということは、その人生そのものを豊かにします。それは自分が確かだと思っているよりも、もっと大きなものにふれる、信じられる教えにふれることが出来たかどうか、という一点にあります。自分の心をいくら鍛えても穏やかにはなりません。そういうことでいえば、頭がいいとか、感覚がいいかという人の能力とは関係ないのです。だからお念仏の教えに遇って初めて、人間の能力とか才覚ということだけでは、人生が豊かにならないということがわかります。（中略）生きていく上では、能力や才覚の違いは大いに関係があると思います。ですが人間としての尊さは誰もみな同じなのです。そこに気付けるかどうか、自分は何でも知っているという思いがあればあるほど、気付く事は難しく、また教えは聞き難いのです。

（『ご法事を縁として』）

※私たちの人生での様々なご縁は、実は私たちの根拠のない思い込みを破ろうとする、仏さまのはたらきであるといただけるのではないでしょうか。（哲弘 拝）

この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。